

サッカー部の俺が教室で全裸測定 されて3メートル射精させられた件

目次

| | |
|--------------|----|
| 教室の審判 第1話：罨 | 2 |
| 教室の審判 第2話：測定 | 12 |
| 教室の審判 第3話：反応 | 25 |
| 教室の審判 第4話：開帳 | 36 |
| 教室の審判 第5話：射精 | 48 |
| あとがき | 57 |

教室の審判 第1話：罨

夕陽が西の窓から差し込む空き教室に、藤堂蓮は一人で立っていた。

サッカー部の練習後、スマートフォンに届いた匿名のメッセージ。『三号館の205教室に來い。お前に話がある』

。怪しいとは思ったが、無視するのも癪だった。蓮は氣が強い。誰かに命令されることが何より嫌いだ。

ドアを開けて中に入ると、教室は予想通り無人だった。机と椅子が整然と並び、黒板には前の授業の痕跡が残っている。窓の外では部活動の聲が遠くに聞こえた。

「誰もいねえじゃねえか」

蓮は舌打ちした。悪戯だったのか。時間の無駄だ。踵を返そうとした瞬間、背後でドアが開く音がした。

「よお、藤堂。待たせたな」

振り向くと、そこには見覚えのある男が三人立っていた。先頭にいるのは氷室京介。学内で名の知れた男だ。裕福な家庭の出身で、複数のサークルを取り仕切っている。その後ろには体格のいい楠木誠と、細身だが鋭い目つきの沢村隼人。

「氷室……？ お前らが呼んだのか」

「そうだよ。ちょっと話があってな」

氷室の口調は軽いが、目は笑っていない。楠木と沢村が左右に分かれ、蓮を挟むように移動する。嫌な予感が背筋を這い上がった。

「話って何だよ。俺はお前らと関わりねえだろ」

「いや、大ありだ。お前、うちのサークルの奴を告げ口しただろ？」

蓮の記憶が一瞬で蘇る。二週間前、学内の飲み会で酔った男子学生が女子学生に絡んでいた。止めに入ったが相手は聞かず、仕方なく教員に報告した。その男が氷室の仲間だったのか。

「あれは正当な対応だ。お前らの仲間が悪い」

「正当？ ははっ、サッカー部の優等生様はそう思うんだな」

氷室が一步前に出る。蓮も一步下がらない。

「で、それがどうした。文句があるなら正面から来いよ」

「ああ、そのつもりだ」

氷室が指を鳴らすと、楠木と沢村が同時に動いた。蓮の両腕が背後から掴まれる。

「おい、何しやがる！」

蓮は腕を振り回して抵抗したが、楠木の力は予想以上に強い。氷室がゆっくりと近づいてくる。

「お前には少し、立場ってもんを教えてやる必要があるな」

「ふざけんな！ 離せ！」

蓮は足を蹴り上げたが、沢村が素早く足首を掴んで押さえ込む。三対一では分が悪い。それでも蓮は抵抗をやめなかった。

「暴れるな。大人しくしてりゃ痛い目に遭わずに済むのに」

「誰が大人しくするか！ クソが！」

氷室が冷たく笑う。

「気が強いのは知ってたが、ここまでとはな。まあいい、その方が面白い」

氷室の手が蓮のジャケットの襟を掴んだ。ゆっくりと引き下ろされる。

「やめろ！ 何するつもりだ！」

「見ての通りだよ。お前を丸裸にする」

蓮の目が見開かれる。

「は……？ 正気かお前！」

「正気だよ。それとも、裸にされるのが嫌なら、土下座して謝るか？」

氷室の提案に、蓮は即座に答えた。

「断る！」

「そうか。なら仕方ないな」

ジャケットが完全に剥ぎ取られる。蓮は白いシャツ姿になった。サッカーで鍛えた胸板がシャツ越しに浮かび上がる。

「次はシャツだな」

氷室の指がシャツのボタンに触れる。蓮は体を捻って抵抗したが、楠木と沢村がしっかりと押さええている。

「やめろ！ 触んな！」

「うるせえな。静かにしてろ」

楠木が蓮の口を手で塞ぐ。蓮は唸り声を上げながら暴れ続ける。

ボタンが一つ、二つと外されていく。シャツの前が開き、蓮の胸が露わになる。サッカーで鍛えた引き締まった腹筋、うっすらと汗ばんだ肌。

「おお、なかなかいい体してんじゃん」

氷室が感心したように言う。蓮は睨みつけるが、口を塞がれているため何も言えない。

シャツが完全に脱がされる。上半身裸の蓮が楠木と沢村に押さえつけられている。

「次はズボンだな」

氷室の手が蓮のベルトに伸びる。蓮の目に恐怖が浮かぶ。それでも抵抗をやめない。足を蹴り上げようとするが、沢村が足首を掴んで動けなくする。

「暴れんなんて」

ベルトが外され、ズボンのボタンとファスナーが下ろされる。氷室が一気にズボンを引き下ろした。

「んんっ……！」

蓮の唸り声が教室に響く。ズボンが膝まで下ろされ、白い下着が露わになる。サッカー選手らしい引き締まった太ももの筋肉が剥き出しになった。

「おお、スポーツ選手の脚だな。いい筋肉だ」

楠木が笑いながら言う。蓮は恥辱に顔を赤くしながらも、睨みつけることをやめない。

ズボンが完全に脱がされる。蓮は上半身裸、下半身は下着一枚という姿になった。

「さて、最後だな」

氷室の指が蓮の下着の縁に触れる。蓮の目が恐怖に見開かれる。楠木の手を振り払おうと必死に頭を動かす。

「んんーっ！　んーっ！」

「最後のチャンスだ。謝るか？」

楠木が手を離す。蓮は息を荒くしながら叫んだ。

「ふざけんな！　絶対に謝らねえ！」

「そうか。なら仕方ないな」

氷室が下着を一気に引き下ろした。

「やめろおおっ！」

蓮の絶叫が教室に響く。下着が膝まで引き下ろされ、股間が露わになる。蓮は必死に足を閉じようとしたが、沢村がしっかりと足首を掴んでいる。

「おお……」

氷室が感嘆の声を上げる。蓮の股間には、まだ勃起していない男性器が垂れ下がっている。サッカーで鍛えた下半身の筋肉に囲まれた、生々しい肉の塊。陰毛も濃く、男らしい。

「なかなかのもんじゃねえか」

楠木が笑う。蓮は顔を真っ赤にして叫んだ。

「見るな！　クソ野郎ども！」

「見るなって言われてもなあ。もう丸見えだぞ」

氷室が蓮の股間を指さす。蓮は屈辱に唇を噛んだ。

下着が完全に脱がされる。蓮は完全な全裸になった。サッカーで鍛えた引き締まった体、胸板、腹筋、太もも、そして股間。すべてが三人の男たちの視線に晒されている。

「さて、じっくり観察させてもらおうか」

氷室が蓮の体を上から下まで眺める。蓮は屈辱に震えながらも、睨みつけることをやめない。

「くそ……絶対に……許さねえ……」

「許さない？ ははっ、今のお前に何ができるんだよ」

氷室が蓮の顎を掴んで顔を上げさせる。蓮は唾を吐きかけようとしたが、氷室が素早く避ける。

「おっと、危ねえな」

氷室が蓮の頬を軽く叩く。蓮は歯を食いしばる。

「沢村、カメラ出せ」

「了解」

沢村がスマートフォンを取り出す。蓮の目が見開かれる。

「おい、まさか……！」

「そのまさかだよ。お前の裸、しっかり記録させてもらう」

カメラのシャッター音が連続して鳴る。蓮の全裸姿が様々な角度から撮影される。正面、側面、背面。

「やめろ！ 撮るな！ 消せ！」

「嫌だね。これはいい記念になる」

氷室が笑う。蓮は屈辱に涙が滲みそうになるが、必死に堪える。泣いたら負けだ。絶対に泣かない。

「さて、次は身体検査だな」

氷室の手が蓮の胸に触れる。蓮は体を捻って抵抗したが、楠木と沢村がしっかりと押さええている。

「やめろ！ 触んな！」

「うるせえな。大人しくしてろって」

氷室の手が蓮の胸板を撫でる。サッカーで鍛えた硬い筋肉の感触。

「いい体してんな。サッカー選手ってこんな体になるのか」

「知るか！ 離せ！」

氷室の手が下に移動する。腹筋を一つ一つ確かめるように撫でる。蓮は屈辱に体を震わせる。

「六つに割れてるな。すげえ」

氷室の手がさらに下に移動する。蓮の下腹部、そして……。

「やめろおおっ！」

蓮の絶叫が響く。氷室の手が蓮の股間に触れた。まだ萎えたままの男性器を手のひらで包み込む。

「おお、結構重いな」

「離せ！ クソが！ 殺すぞ！」

「殺す？ ははっ、今のお前にそんな余裕あんのか？」

氷室の手が男性器を軽く上下に動かす。蓮は屈辱に歯を食いしばる。

「くそ……くそ……！」

「楠木、こっち押さえてろ。沢村はしっかり撮影しろ」

「了解」

楠木が蓮の両腕をしっかりと押さえる。沢村がカメラを股間に向ける。蓮は必死に足を閉じようとしたが、氷室が膝を使って足を開かせる。

「足、開けよ」

「嫌だ！」

「開けて言ってんだよ」

氷室が強引に蓮の太ももを左右に押し開く。蓮の股間が完全に露わになる。男性器だけでなく、その下の睾丸、股の付け根まで。

「おお、全部見えるな」

カメラのシャッター音が連続して鳴る。蓮は屈辱に顔を真っ赤にする。

「やめる……やめてくれ……」

「今更何言ってんだよ。もう遅いだろ」

氷室の手が睾丸を軽く触る。蓮の体がビクッと反応する。

「おっ、敏感だな」

「触んな！ クソ野郎！」

「まだ元気だな。もっと大人しくさせてやるよ」

氷室が沢村に何かを指示する。沢村がポケットから小さな袋を取り出した。中には羽根が入っている。

「これ、使おうぜ」

「羽根……？ 何するつもりだ……」

蓮の不安が的中する。氷室が羽根を取り出し、蓮の胸に当てた。

「ひっ……！」

蓮の体が跳ねる。羽根の柔らかい感触が胸を撫でる。くすぐったいような、気持ち悪いような感覚。

「やめろ！ 気持ち悪い！」

「気持ち悪い？ これからもっと気持ちよくしてやるよ」

羽根が蓮の乳首に当たる。蓮の体がビクッと大きく反応する。

「あっ……！」

「お、乳首敏感なのか。いいね」

羽根が執拗に乳首を撫で回す。円を描くように、時には軽く弾くように。蓮は屈辱に齒を食いしばるが、体が勝手に反応してしまう。

「やめ……やめろ……！」

「嫌だね。お前の体、正直だぞ」

氷室が笑う。羽根が胸から腹筋へと移動する。一つ一つの筋肉の谷間を丁寧に撫でる。蓮の体が小刻みに震える。

「くそ……くそ……！」

羽根がさらに下に移動する。下腹部、そして……。

「やめろおおっ！」

蓮の絶叫が響く。羽根が股間に触れた。萎えたままの男性器の表面を、羽根の先端がゆっくりと撫でる。

「んっ……あっ……！」

蓮の口から意図しない声が漏れる。屈辱だ。こんな声、出たくない。でも体が勝手に反応してしまう。

「おお、いい声出すじゃん」

楠木が笑う。蓮は顔を真っ赤にして睨みつける。

「うるせえ……！」

羽根が男性器を根元から先端まで丁寧に撫で上げる。蓮の体がビクビクと反応する。そして――。

「あ……」

氷室が気づく。蓮の男性器が、わずかに膨らみ始めていた。

「おお、反応してきたな」

「ち、違う……！　これは……！」

「これは？　勃起し始めてんだろ」

氷室の指摘に、蓮は激しく首を横に振る。

「違う！　そんなんじゃねえ！」

「じゃあ何だよ。体は正直だぞ」

羽根が執拗に男性器を刺激し続ける。先端の尿道口周辺を重点的に。蓮の体が小刻みに震え、男性器が少しずつ大きくなっていく。

「やめる……やめてくれ……」

蓮の声に力がなくなってくる。体が疲れてきたのか、それとも快感に負けそうになっているのか。

「もっと反応させてやろうぜ」

氷室が沢村に合図する。沢村が別の袋を取り出した。中には氷が入っている。

「次は温度差だ」

氷が蓮の胸に当てられる。

「冷たっ……！」

蓮の体が跳ねる。氷の冷たさが胸を刺激する。そして氷が乳首に当たる。

「ひあっ……！」

蓮の体が大きく跳ねる。冷たい刺激が乳首を直撃する。乳首が一瞬で硬くなる。

「おお、立ってきたな」

氷室が笑う。氷が執拗に乳首を刺激する。蓮は屈辱に涙が滲みそうになる。

「やめる……もうやめてくれ……」

「まだまだこれからだよ」

氷が胸から下に移動する。腹筋、下腹部、そして股間へ。

「やめろおおっ！」

蓮の絶叫が響く。氷が股間に当てられた。男性器に直接、冷たい刺激が襲う。

「んああっ……！」

蓮の体が激しく跳ねる。冷たさと羞恥が混ざり合い、体が混乱する。そして――。

男性器が、さらに膨らんだ。半勃起の状態になる。

「おお、完全に反応してるじゃん」

「違う……！　これは……体が勝手に……！」

「体が勝手に？　ははっ、言い訳だろ」

氷室が蓮の半勃起した男性器を指で弾く。蓮の体がビクッと反応する。

「やめろ……もう……やめてくれ……」

蓮の声に懇願の色が混じり始める。それでも睨みつけることだけはやめない。

「まだまだだよ。次は測定だ」

「測定……？」

「ああ。お前の股間、しっかり記録させてもらうからな」

氷室がニヤリと笑う。蓮の顔が恐怖に歪む。

第1話、終わり。